
Technical Arts

壬生菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T e c h n i c a l A r t s

【Nコード】

N 3 6 6 0 Y

【作者名】

壬生菜

【あらすじ】

一つのVRMMOを舞台にした短編集。人気スキルからネタスキルまで様々なモノが存在する世界で、それぞれのスキルを愛用するプレイヤー達を書いたお話。 不定期更新です。

01・主と呼ばれた男

石造りで統一された建物と、建築物と同様に石のブロックを使って作られた地面。大きな街には負けてしまいが、それでも町の規模の割りに様々な人が行き交うそんな町の道端に、ぼうつと人々を見つめる一人の男がいる。

地面に根を張っているのかと言わんばかりの長い時間座ったままな男。名をグロリアスという。栄光、栄誉といった輝かしき物を連想する単語だが、今の彼の外見はその意味からはほど遠い。

ぼさぼさの髪。伸び放題のヒゲ。既にそれが何であつたのか判別に困るほどぼろぼろになつてしまったローブ。穴の開いた靴。ローブの中に来ている衣服も当然それらと大差無く、彼がそのままの格好で誰かに名乗ったとすれば、冗談もほどほどにしろと皆大笑いするだろう。それほどに彼の見た目というものは汚かった。

そして、彼はその風貌の通りに貧しかった。服を買う金も無ければ、パン一つ買う金も無い。本来なら、そんなグロリアスを待ち受けている未来は、餓死か病による死の二つであろうが、この世界でそういった心配をするものはいない。

ここは電子データによって構築されたVRMMOの世界。

仮にここで死んだとしても、それは仮初の物であり本物ではない。つまり、グロリアスはどれだけ空腹になろうと死ぬことはないし、それは病であつても同様のことだ。

では何故、彼はVRMMOという世界においてそんな格好をしているのか。

それには、とある理由があつた。

RPGというゲームにおいて、防具というのは非常に重要な物の一つであり、彼のその格好もまた防具だから、ということに他ならない。

ばーっと先を急ぐプレイヤー達を見つめながら、グロリアスの視界の隅にあるモノが映った。それと同時に、待ちに待った獲物の到来に、グロリアスは口角を吊り上げた。彼はただ道端に座っていたのではなく、餌の品定めをしていたのだ。標的を狙う獣のように鋭く眼光を光らせながら、じつくりと、ゆっくりと観察を続けていた。はやる動悸を抑えながら、ゆるりと立ち上がり一歩、また一歩と距離を詰めて行く。

気付かれてはいけない。目標を範囲内に入れるまで、決して焦ってはいけない。そう自身に言い聞かせながら、彼は静かに接近を続ける。その様はまさに肉食の獣であり、それらがする狩りの仕方にも通じたものがある。

ターゲットに気付かれずに近付くこと。

彼がこのゲーム内でやっていることは、第一にこれが重要といえる。

そして次に大切なのが、いざ対峙した時のやり方である。

彼はこれを最近になってようやく身につけた。それを実践するのがこれは初めてであり、それがまた彼の鼓動をはやめた。

(ここだ)

手を伸ばせる距離まで近付いてからの彼の行動は速かった。

すぐさま姿勢を低くし、逃がさぬように全力で標的の両足に抱きつく。

「だんなっ、貴族の旦那っ！ あっしや、あっしやあもう三日の何も食べていないんでさあつ、何か、何かお恵みをつ！！」

彼にとっての狩り。それはつまり“物乞い”である。

多種多様なスキルが存在し、レベルの変わりにスキルを上げてい

くことで強くなっていく。それが彼の現在プレイしているゲームのシステムであり、物乞いは数多くあるスキルの中の一つだ。

しかし、上げている者はほとんどいない。VRではなく、モニタ越しにプレイする古いタイプであればもう少し多かったかもしれないが、VRMMOでは実際に自分がキャラクターになって動かなければいけない。となれば、グロリアスのように物乞いをやる物好きがいるはずもない。おまけに物乞いスキルを上昇させる装備が、彼の着ているぼろぼろでみすばらしい衣装とくればなお更だ。

「は、離せっ！ 物乞いにやるものは何も無いっ！！」

「そ、そんな事言わずに、どうか、どうかっ！ 何でも良いんですっ」

汚い男が突然足へと抱きついてきたのだから、当然貴族はその男の腕を振りほどこう精一杯足を動かすのだが、ステータスで負けてしまっているのか足が抜ける気配は全く無かった。それどころか、絶対に逃がすまいと足首程度だったグロリアスが回した腕は既にヒザにまでのぼってきていた。

どんどん近付いてくる汚らしい男に、貴族にありがちな整った顔を歪め、顔を真っ青にしていた。

「わ、わかった。わかったから離してくれ！ ほら、これをやるから、なっ？」

貴族は懷からまるで焼きたてであるかのように湯気を立てる分厚いステーキを取り出し、腹ペコであろう男の鼻先でぷらぷらと揺らす。ついに貴族は負けを認め、物乞いであるグロリアスにアイテムを差し出したのである。

そしていまだ彼の目の前で揺れるステーキの放つ香りときたら、彼の減りに減った腹を一鳴きさせるのには十分すぎるほどだった。

いかにこのゲームで感じる空腹感がシステムから与えられているモノとは言え、現実のそれとさほど変わらないものをプレイヤーに体感させている。当然、彼は何か食べたくて仕方が無い状態なのは言うまでもない。

もちろんどこまでも腹が減るという鬼畜仕様なわけもなく、空腹はスパイスと言える程度にしかないが、彼がそのスパイスを手に入れてから数時間が経過していた。

いかに最高の調味料だろうとも、それしか無いのでは何の意味も無い。

そんなわけで、グロリアスはもつと何か良いものを出させようと考えるまえに、肉を受け取っていた。と同時に、拘束が解かれた貴族はさつさと逃げ出し、どこかへ消えてしまった。

物乞い。そんなものを上げる奇妙な男の苦難と勝利の道はここから始まった。

人通りの少ない場所へと移動し、彼は更なる物乞いの高みへとのぼるにはどうすれば良いのかを考え始めた。

まずグロリアスが思いついたのは、拠点となる場所を確保したいということだ。

街中にある銀行に物や金を預けておいても別に問題は無いのだが、銀行周辺に多々出没するスリプレイヤーは多い。それを避けるためには自分専用のスペース、言ってしまうえば“家”が必要になる。

しかし、そこでまた彼は考えた。

それは、「物乞いの収入で家なんて建てられるのか……？」ということだ。

なにせどこまで言っても物乞いだ。貴族様貴族様とNPCにへばりついて金品を奪い取ってもたかが知れているし、かといって普通のプレイヤーから良い物をもらった覚えなんて一つも無かった。

彼を見たプレイヤーの多くは、物乞いを上げている珍しい彼に喜んでアイテムを渡すのだが、上等な物を渡すものはいるはずもない。ようは、リアルで路上パフォーマンスを見た対価に小銭を払う程度の感覚だとグロリアスは納得している。

それ以外にプレイヤーが彼にあげるモノは馬鹿にする言葉と嘲笑程度。とてもじゃないがPCを相手にして家を建てることなんて夢のまた夢。

さて、では彼はどのようにして金を稼ぐのか。

鍛冶や木工と言った人気スキルを上げて金を稼ぐのか、それとも剣や魔法を使って敵から金品を奪い取るか、どちらも否だ。なぜダメなのかと言うと、それは彼の主義に反するからだろ。

物乞いとしてロールプレイするのであれば、そのスキルを活用して成り上がるべきであり、他で金を稼いでしまつては、それはもう物乞いではなく物乞いスキルを持っているただの薄汚い戦士ではない、それが彼の考えだ。

つまり、物乞いを主軸とし何らかのスキルを組み合わせ、より稼ぎやすい物へと昇華させなければならなかった。

(とは言つものの、何が良いのやら)

スキル一覧の書いてあるウィンドウを眺めながら、一つ一つ組み合わせた時にどうなるか思索を続ける。

自然を操ることが出来るようになったり、風景に溶け込むことで敵に察知されなくなる自然同調。

気配を消したり足音を無くせる上に、姿を消すことまで出来る隠密。

それとも、物乞いで敵にくつついている隙に物を盗めるスリか。一応、考えた中ではスリが比較的使えそうではあったが、彼としてはいささか微妙と言える。

PCとNPC、それからモンスターからもアイテムを盗むことが

出来るスリだが、それは盗むだけに飽き足らず、相手のカバンの中に爆弾をこっそり忍ばせ爆殺することも出来るという、意外に強いスキル、それがスリだ。

確かにコレと物乞いの組み合わせはそこそこ強いだろう。

物乞いしている間にこっそりと爆弾をしのばせ爆破。ドロップアイテムを楽にゲット出来る。なんていう考えだったが、爆弾代が必要なうえに一撃で倒せるとも限らない。何よりも、これだとキャラの傾向が犯罪者になってしまい、いずれは街中にいるだけで警備兵に殴り殺されるようになる。そうなると思えば物乞いどころではなくなってしまう。

では次によさそうだと思った隠密かと言えば、これもちよつとうま味が少ない。

貴族などの金持ちNPCは、基本的に物乞いスキルの高いPCを見つけると足を速めたり逃げ出したりするのだが、隠密を使えばそれを無視して正面から捕獲しにいける。

しかし基本はNPCにしか使えない。故に、彼の中でスリと隠密両方とも微妙という結論が出た。

（困ったな……）

再びスキルウィンドウを見ながらグロリアスは考えた。

物乞い単独での収入は少ないが、それは言い換えれば貴族達の所持金がしょっぱいからではないだろうか。NPCというモノを、もっと大きく広げて考えてみると、貴族よりも遥かに金を持っているヤツらは数多くいる。

例えば、モンスター達がその筆頭候補にあがる。

通常武器や魔法で倒さなくてはいけないソレらを、何とか攻撃せずに倒せれば――。

（そうか、これが！）

あるスキルを見た瞬間に、彼の脳裏で一つの閃きがあった。

仮定でしか無いが、そのスキルと物乞いを組み合わせれば貴族からの物乞いよりも遥かに美味しいかもしれない。もしもドロップアイテムと物乞いでもらえるアイテムとに大きな差があったとすれば、この組み合わせは破綻してしまうが、そうでなければ家ですら夢ではない。

（よし、早速ためしてみよう）

彼はすぐさま立ち上がり、街の外へと歩を進めた。

グロリアス。その名の通りに栄光を手にする階段を上り始めた。

グロリアスと呼ばれる男が物乞いと組み合わせるべく選択したスキル。それは一般的には死にスキルと言われている物だ。ネタですらなく、死んでいると言われているほどに使い道が無い。

ただそれは少し使ってみてゴミだと判断してしまったからであり、長く使い込んでいたり、彼のように不人気スキルと組み合わせたりしてみなかったのが原因だろう。

そんな彼は、その死にスキルを上げるためにある場所へと向かう。街から外に出て真っ直ぐ歩いていったところにある森。そこが彼の目的地だ。

そこでは伐採スキル持ちが木をきってスキル上げをしているだろうし、森の中にある湖で釣りスキル上げをしているPCや水泳を上げている人達もいるであろうが、彼はそんなモノに目もくれずある生き物を探す。

白く、ぴよこぴよこと飛び跳ねる小動物。愛玩用のペットとして人気のある生き物、ウサギだ。

彼はそのウサギを目ざとく見つけるとすぐさま飛び掛り、両手でふわふわとしたその身を逃げられないように拘束した。

ジタバタと逃げようとする小動物だが、貴族NPCですら逃げられない彼のステータス値に勝てるはずもなく、ただ手の中でもがき続けるしかできなかった。

そして、彼はスキル上げを始める。

「よーちよちよち、良い子でちゅねえー」

決して赤ちゃん言葉スキルなどというモノではなく、“言語”と呼ばれるスキルだ。

コレはその名の通りに、上げれば上げるほど多種族と言葉を交わせるようになるモノであり、言語スキルの効果は動物だけにとどまらず幅が広い。

しかし、あくまでも言葉が通じるようになるだけであり、それ以外の何者でもない。大抵のプレイヤーは、これと生物を捕獲できるようになる調教を組み合わせようとするが、言語にさくスキル値を戦闘方面や生産方面に振り分けた方が良いということにすぐに気が付き、使われることはほとんどない。そのため、死にスキルとなってしまった。

中には「動物と会話できるなんて夢のようっ！」とかいう乙女チックなプレイヤーもいることはいるが、そういったPCは稀だ。ある程度上げ、好きなペットと喋ったらそれ以上は上げなくなったり、満足して下げたりしてしまう。

「はぁーん、ラブリーでちゅうう」

汚い男が赤ちゃん言葉でウサギに話しかけているという絵面がよほど恐ろしかったのか、気付けば彼の近くにいたPCは全員いなくなっていた。

人として何か大切な物を犠牲にしているような気がしつつも、グロリアスは言語を上げ続けていく。

普通なら途中でイヤになってしまふような苦行だが、上げている者が少なければ少ないほどスキル上昇にボーナスがかかるという仕様も手伝い、彼のスキルはかなり早いスピードで上がっていった。

そして、ついに彼がお目当てのヤツらに物乞いと言語を試す時がやってきた。

醜い顔と、成人男性の半分程度しかない身長 of 敵モンスター。獣人系の中で最弱と言われるゴブリン。これに物乞いと言語が通用するのなら、より上位の獣人にも効くはずだと彼は考えた。

（行くか……！）

ゆっくりとゴブリンの背後から近寄り、狙いを研ぎ澄ます。

目標は明後日の方向を見ながらぼーっとしているようで、背後から忍び寄るグロリアスに気付く様子は無かった。

「だんなあああああー！」

背後から抱きつくようにゴブリンに飛び掛り、すぐさま物乞いを発動させる。

行き成りの不意打ちにゴブリンは驚いたのか、身体をびくりとさせつつも背中にとわりついてきたグロリアスに目をやった。

「な、なんだゴブ？ きつたない人間だゴブ……臭いから離れてほしいゴブ」

酷い手抜きな語尾に何とも言えない気分になったグロリアスだが、言語スキルが効いていることに心の中でガッツポーズをとった。

普通人間型のNPCにしか効かないと思われるいた物乞いだが、モンスターに使えないのは言葉が通用しないからだと彼は考えたのだ。もしも言葉が通じるのであれば、モンスターには無効というのも考えにくい。何しろ、このゲームは自由度をテーマにしているのだから。

「ゴブリンの旦那あ、何か恵んでくださいよう。この哀れな人間めに、どうかっ」

「わかったわかったゴブ。ゴブはゴブリンの中でも一番の綺麗好きゴブ。お前みたいな汚いのにくつつかれるのはゴメンゴブ、だからこれをやるから離れるゴブ」

どう見ても綺麗好きには見えないゴブリンだが、グロリアスにくつつかれているのが相当イヤだったのか、少し重みのある小さな袋を彼に手渡した。

「さすが獣人の旦那っ、器がでつけえ！」

「やめるゴブ、照れちゃうゴブう」

そんな事を言いながら、ゴブリンはどこかへ消えていった。

ゴブリンが消えるのを見届けた後、グロリアスがもらった袋を開けてみると、中にはこの世界の通貨がわずかに入っていた。それは丁度ゴブリンを倒した時に出る金額と同程度のモノであり、彼の予想が確信へと変わった瞬間だった。

彼はこう考えた。

貴族に物乞いでアイテムをもらうと、ヤツらは必ずどこかへ消えてしまう。その後にどれだけ探しても、一定時間が経過しないと出てこないという仕様。

これは剣や魔法で倒した場合と、物乞いで物をもらうのは同じなのではないか、ということだ。違いといえば、傾向が犯罪者に傾かないことくらいなもので、もらえるアイテムとドロップするアイテムの違いは情報サイトのドロップ情報を見ても変わらない。

となれば、モンスターへの物乞いが成功すれば、倒したときと同じだけの収入を得ることが出来るということに他ならない。問題はいちいち物乞いするのがめんどくさいことかもしれないが、戦闘では倒せないような上位の獣人に物乞いしにければ一回で多くの収入を得ることが出来る。

「ふふ、ふふふ……！」

グロリアスはニヤけた表情を隠そうともせず、次なる獣人を探すために視界の真ん中にウェブブラウザを出現させ、情報サイトを開いた。

以前のVR機では出来なかったことだが、最近のVR機はゲームをしながらウェブブラウザなどを開いたりすることが出来る。それまではいちいちログアウトしなければならなかったのだが、ユーザから不満の声が多く寄せられ、最新型にその機能を搭載という形で実現した。パッチで何とかならないのかという声もあったが、どうやら無理だったらしい。

（さて、次はどれが良いかな、っと）

まだ始まったこのMMOの情報は少ない。それでも低いスキルで倒せる獣人がいくらか載っていたのを見つけグロリアスは安堵した。更新してくれた名前も知らない人物に感謝し、次なる標的、オークがいるであろう場所へと向かうことに決めた。

それからグロリアスは、毎日毎日獣人から金を巻き上げた。個々に設定された獣人の機嫌というものなど関係無く、システムでの判定にさえ勝てればヤツらは渋々ながらも金を渡す。来る日も来る日も物乞いを続ける彼は、いつの間にか有名になっていた。

それもそうだろう。物乞いと言語という二大ゴミスキルを上げている上、モンスターの大量に突撃していったかと思えば、その全てに媚びへつらってアイテムを手に入れているのだから。

常人には出来ないことを平気でやってのける。そんな彼を人々は賞賛した。

もっとも、真似をする者はいなかったのだが。

そうして、グロリアスはいくつかの目標を達成したのだ。

一つ。

家を建てること。

二つ。

物乞いと言語を100という限界値まで上げること。

彼は寝る間も惜しんでひたすら金を集め、それと同時にスキルを鍛えた。

笑われながら、バカにされながらそれでも目指した。

物乞いでの最強の道を。

彼は、ようやく最強への道の開始地点へと到達した。

このゲームはスキルをカウンターストップ——略称カンスト——させてからようやく本番になる。キャラを育てきってから、色々な遊びを自分で探していくのだ。

地図作成スキルを持つものは、あらゆる土地を巡り地図を書き、遺跡を見つけては内部の詳細なマップを書き上げる。そしてそれを高額で売りつける。

戦闘スキルを持つものはその地図を購入し、最奥にいるであろう凶悪なる魔物を討伐し、数々の財宝を手に入れる。

そして帰り道でPKが仕掛けた罠にかかり、死ぬ。

そういった様々なことを体験しながら、プレイヤー達はステータスやスキル以外での強さを身につけていく。

まだ彼は、最初の階段を上りきったにすぎない。

ただ、グロリアスは嬉しかった。ようやく目標の一つであった家を手に入れたこと。銀行前で金をスラれることも少なくなる。こと。ようやく得られた平穩に頬を緩めながら4畳半しかない自慢の我が家の見つめるのだった。

ちなみに、彼の家の外見はダンボール風だ。

家を作ってくれた木工職人に頼み込み、追加料金を払う形で外観をダンボールにしてもらったのである。

物乞いなんだから、見た目はこうじゃなきゃダメなんだよ！と力説する彼に苦笑いしつつも、きっちりダンボールに見えるようにこだわって作られた一品。

当然、家の中もダンボールだし、アイテムや金を保管しておくためのチェストもわざわざダンボール型の物を職人に頼んで作ってもらった。

折角のマイハウスなのだから、グロリアスは細部までこだわったかった。

とはいえ、物乞いが家を持つておかしくないか。と思うところもあつたりするのだが、物乞いのまま成り上がるのを目に見えて知ることの出来る何か欲しかったということもあつて、それならダンボールハウスにすればいいと彼は納得した。

また、ふと思ひ浮かんで採用したダンボールの家だが、彼はそれを気に入っていた。

小さい頃に、友人達と作ったダンボール製の秘密基地をふと思ひ出したからだ。

懐かしい記憶に浸りながらも、彼は更なる強敵を目指して各地を放浪する。

彼の転機と言えるモノは、家を建ててからおよそ一週間後に訪れた。

新たなダンジョンが発見され、その最奥に眠るユニークモンスターの存在が確認されたことと、それが今までに無いほどの強さを持つていたこと。

少数でのパーティによる討伐が幾度と無く試みられたが、いずれも敗北。唯一ボスを倒せたのは大規模ギルドだけだ。少人数、ましてや単独の撃破などは極めて困難と言われているボス。それを倒しに行く、そうグロリアスは決めた。

特に新しく用意するものなどなく、言語と物乞いスキル。物乞いが失敗して攻撃された時用の回復アイテムと、少々の食料。それから夜や暗い場所などで使う松明さえあれば十分だったのもあり、彼はすぐに出発した。

街間の移動アイテムを作っている錬金術士からアイテムを購入するために、最寄の町へと来たグロリアスだったが、目的地から一番近い村まで飛べる物がこの日は売りに出ておらず、泣く泣くこの辺りではもつとも大きい街へと飛べるもので妥協した。そこであれば、行きたい村への移動アイテムが売りに出ている可能性が高いからだ。流石に大規模な街ともなればプレイヤーが多く、あちこちで様々なものが売りにでていた。中にはグロリアスが知らない物もあり、今すぐにでも飛びつきたいほどに美味しそうな二オイを放つ見知らぬ料理や、見るからに強そうな職人お手製の武器など、見ているだけで彼の目を楽しませた。

普通のVRMMOと違い、ウィンドウに素材を放り込み出来るのを待つだけというつまらないのではなく、素材の加工ということから自分の手で作ることも出来るというこのゲームの独自の仕様からか、独創的な物が多く、それがより一層あちこちを見て回ったくなる彼の欲求を高めた。

それにしても、このアイテム達に限らず、街までもがプレイヤー達が一から作り上げたという話なのだから凄まじいモノだなあ、とグロリアスは周囲をぐるりと見渡しなから思った。

ただ、その独自仕様のせいで、強烈な味覚音痴プレイヤーが作った殺人料理で昇天しかけたこともあったが、それもまた良い思い出だった。

しかし、今日は買い物に来たわけではないと自分をいましめ、目的の移動用アイテムを探す。

お目当ての物を探すときのコツだが、一般的には銀行の近くで探すのが一番だ。

ここなら金をおろしてすぐに買うことが出来るし、盗まれないように銀行にしまうこともできる。その短い時間のうちに盗まれることもあるが、それでも移動距離が長くなるよりは安全だ。

そんなわけで、グロリアスも銀行の近くを探し、目当ての物はすぐに見つかった。

販売していた錬金術士に代金を支払い、礼もそこそこに移動アイテムを使用した。

村に着くと同時に、プレイヤーが情報を交換している掲示板の書き込み通りに進み、ある洞窟を発見した。

未だ名も無い洞窟。その奥深くにいろと言われているボス。

そこにたどり着けるかがまず問題だった。何しろ普通のダンジョンよりも遥かにモンスターが多く、内部の複雑に入り組んでいた。

まだ発見されたばかりということもあり、内部の地図は入り口から近い場所が記された物しか出回っていない。もしもグロリアスが大規模ギルドに所属していれば完成品の地図を入手出来たのだが、残念ながらギルドに所属しない孤高の物乞いだった。

（とにかく、中に入って探索してみないことには何も進まないな）

彼はそう考え、洞窟へと進入した。

中はまるで巨大な岩をくりぬいて作られたかのように、全てが石で出来ており、いたるところに苔が生えていた。

割とどこにでもあるような洞窟だが、それらよりも遥かに湿度が高いのか、じめっとした不快さにグロリアスは顔をしかめた。

陽の光が届かない暗い洞窟の中を、松明の光を頼りに進んでいくと、悪魔族の最弱のモンスターであるインプを発見した。だが最弱だからと侮ってはいけない。その小柄な身にふさわしい程度の体力しかないインプだが、魔法を使ってくる。しかもデバフと言われる弱体系の魔法を得意とし、なおかつ近くにいる味方に合図を送り集団で襲い掛かってくる恐ろしいヤツだ。

いかに歴戦の戦士といえど、魔法抵抗が低ければ負けることは無くとも手こずることがある。

だが、そこは戦闘系を取っていないグロリアスだけあって心配無用。無駄に余った合計スキル値を防御系にさいているのだ。

普通に戦闘をするのであれば、まず武器とそれを補助するいくつかのスキル。それから防御系のスキルを選択するのだが、万能にしようとする大抵器用貧乏になる。かといって特化させると特定の攻撃に弱くなりすぎる。だからこそ普通のプレイヤーはパーティを組んで強敵に挑む。

が、グロリアスは違う。まず必須スキルが物乞いと言語の二つしかない。それを良いことに、回避、魔法抵抗、集中、それから回復用に包帯を少しとっているだけあって防御性能は高い。

回避は発見されても接近して物乞いをするため。

魔法抵抗は避けにくい範囲魔法を少しでも緩和すると同時に、デバフに耐え最短距離で敵に近付くため。

集中は、次のスキルの効果を高めるという点に注目し、物乞いの効果を高めるため。

包帯に関しては少々違い、HPやMPなどの自然回復量上げる

自然回復スキルを取っていないという理由もあったが、よくモンスターが包帯をくれるのでついでに上げていたものだ。

包帯を除けば、全て物乞いというものの開始とその成功率を上げるものばかり。

当然、インプなんていう雑魚キャラは彼の敵ではない。

ヤツらに発見されるのも構わず、素早く2匹のインプに近付き、それぞれを小脇に抱えて物乞いをする。

「ねえ旦那達。何か恵んでいただけませんかねえ。何でもいいんです。何でも」

もはや物乞いをする男の態度ではないが、インプほどの雑魚ともなると今までのように過度にへりくだる必要は無かった。

すぐさま懷からアイテムを出して去っていくインプを眺めながら、ゲットしたアイテムを確認して自身のカバンへとしまった。

彼にはある手ごたえがあった。

インプ程度であれば、もはや喋る必要すらなさそうだ、と。

このゲームにはマニュアルとオートがあり、十分にスキルが成長していればオートで楽々生産や戦闘をしたりできる。オートでの物乞いは、実行すると勝手に対象へ手を差し出す。そして判定に成功すると敵はアイテムを渡してくる。

グロリアスはこのオートをあまり活用することは無かったが、それはオートで成功してしまうような雑魚キャラを相手することが少なかったからであり、使えるなら使おうとおもっていた。

（使うならば、今か）

群れるインプに向かって勢いよく走り出し、ヤツらが気付くと同時に両の手をそれぞれ別のインプへと差し出す。

そしてインプがアイテムを懷から出すよりも早く、別のインプへ

と手をやる。

それを何度か繰り返し、残ったのは地面に置かれた大量の小銭といくつかの素材。

ただ手を差し出しただけでアイテムを渡してくる雑魚達に、グロリアスは舞い上がっていた。瞬殺と言っても良いほどの強さ。物乞いが見せた更なる可能性。その事実には彼は興奮を抑えられなかった。道に迷うのもお構いなしに奥へ奥へと進み、インプから小銭を巻き上げた。

結果、調子に乗りすぎた彼はインプの生息地帯を超え、次のレッサーデーモンの生息場所をもオート物乞いを使いながら疾走し、グレーターデーモンの群れに突っ込んで死亡した。いかに回避スキルを限界まで上げていようと、部屋にみつしりと詰まったグレーターデーモン相手は多勢に無勢。首根っこを掴まれて部屋の中央へと投げ入れられ、回避行動を取るまもなく一斉攻撃されたのだった。

（何事もほどほどが肝心、だなあ）

復活ポイントに設定した洞窟近くの村でグロリアスは一人反省会をしていた。

いくらオートで楽々倒せるからって調子に乗りすぎた。彼はそう反省し、次の挑戦はもっとじっくりいこうと固く決めた。

さあ、ではリベンジへ！ と行きたいグロリアスだったが、そうは行かない。

死んでしまったためにデスペナルティがあるのだ。

このゲームでのデスペナルティは二つあるモノのどちらかを選択する。

一つ目は、“ランダムでスキルが減少する”という物。

二つ目は、“一定時間最大HPや攻撃力が減った状態になる”という物。

これを避けるには自身の死体を回収しにいかねばならないのだが、彼の死体は確実に回収不能な場所にある。

仕方なしに彼は二つ目の一定時間の衰弱を選択し、衰弱が治るのを待った。

衰弱が治ったのを確認し、グロリアスはのどかな村を後にし、洞窟へと向かった。

（レッサーデーモンまではオートが効いてたわけだから、一気に走り抜けるのが良いな）

慎重に行くとしたが、それはグレーターデーモンからで十分。ならそこまではオートで物乞いをしつつ走り抜けるのが得策と考え、それを実行した。

適当に走り回ってたせいで全然道を覚えていなかった彼は、何度も洞窟の中で迷子になりつつも、何とかレッサーデーモン地帯を突破することに成功した。

迷子になってしまったことは不幸だったが、おかげで敵にアイテムを乞う回数も多くなり財布の中は随分と暖かくなっていた。

（帰ったら何か美味しいモノでも食おう！）

周囲にモンスターがいないことを確認してから焚いた焚き火のそばに腰掛け、硬いだけでうま味の欠けている干し肉を野菜だらけで肉の全く入っていないスープにつけてかじりながら、グロリアスの頭の中にはダンジョンから帰還した後のお楽しみが広がっていた。少し前に街で見かけた謎の料理。あれが良いか、それともお気に入り料理人の凄まじく美味しい謎の肉で作った串焼きにするか……そ

れと殺人料理を作るアイツには出会わないように気をつけなきゃな、と彼の頭の中は食い物で一杯だった。物乞いとはいえ、金があればメシを買って食うくらいのはするのだ。

随分と減っていたスタミナ値も完全に回復し、グロリアスは再び奥へと向かう。

ここからは彼にとって油断の出来ない道程になる。

グレーターデーモンと、更に奥で待ち構えている強敵達。

しかし、ここから目的地までの距離は比較的短い。その代わりなのだろうか、敵が馬鹿みたいに密集している。

ゆつくりと、慎重に歩を進めた。

出来るだけグレーターデーモンの少ない方を選びながらも、避けられない相手には物乞いを駆使しながら進んでいくと、グロリアスは開けた空間に出た。

石をくりぬいただけだったこれまでの通路や部屋とは違い、黒い石をブロック状にして作られた床と壁と天井。複雑な模様の刻まれた柱と、壁のいたるところに等間隔で設置してある松明。ゆらゆらと光を放つそれらに照らされた、一体の赤い魔人。

その頭上のに表示される名前をグロリアスは確認し、ツバを飲み込んだ。

ダンジョンのボスとなるのは、悪魔族の上級種族である魔人の将、アークデーモン。

同じ上級種族とはいえ、レッサーデーモンとグレーターデーモンとは格が違う。

身の丈は3メートル程度。ねじれた角を頭の両脇から生やし、背中には悪魔の象徴である翼が、その身体をより大きく見せている。そして、手には大型の曲剣。これまでのデーモンは粗末な武器を持っていたが、アークデーモンは格が違うのか、その巨大なシミタ

ーにはどこか禍々しさを感じさせる装飾がされていた。

このボス用に作られたに違いない威容な空間と、そこにただ一体だけという光景アークデーモンの強大さを物語っている。

グロリアスは大きく深呼吸をし、ゆっくりとアークデーモンに向かって進む。

真正面からではなく、なるべく側面をつけるように、大きく弧を描きながら気付かれぬようにじゅくりと、慎重に。

這うように一步一步確かめるように進むグロリアスはまだ見つかっていないことに安堵し、柱の影に隠れて息を整える。

たとえばゲームであっても、こういった一瞬の油断が命取りになりかねない状況には心臓が早鐘を打つ。

一回、二回と深呼吸を繰り返し、敵に傷をつける手段を持たぬ男が次なる柱へと向かって、やはり這うようにして進む。

何度かそれを繰り返すと、丁度アークデーモンの横顔が見える位置へと到達した。

アークデーモンの背後はすぐに壁になっているため、これ以上はもう進めない。あとはもう、ガムシヤラに突き進むだけだ。

（落ち着け、落ち着け。大丈夫、きちんと見て回避だ。何度もオーガとかオークロードで回避の練習したじゃないか。いける、いける！）

必死に乱れる鼓動を落ち着けと抑え付け、回避スキル上げで相対したモンスターを頭に浮かべる。

敵を倒す手段が物乞いしかない彼にとって、回避スキル上げというのは相当辛いものだった。ただひたすら攻撃かわす。そして次の攻撃を待ち、また避ける。それをずっと繰り返し、疲れたら物乞いをして敵を消す。

その過程で得られたマニュアルでの回避テクニックは廃プレイを

する回避型の剣士や魔法士に負けるモノではない。

（っし、行くぞ！）

覚悟を決めるや否や、アークデーモンへと全力で駆けた。

当然、上級の魔人であり、このダンジョンのボスであるアークデーモンはすぐにソレを察知し、迎撃するべく右手に持つシミターを振り上げた。

まずは真っ直ぐ振り下ろすだけの比較的避けやすい一撃。それを横に飛びのき回避。そしてまたすぐに走り始める。

次いで、その豪腕から繰り出されるグロリアスにとって必殺となる横薙ぎの一閃。

「あつぶねえ！」

咄嗟に思っていたことを口に出しながら、スライディングの要領で姿勢を限界まで低くする。グロリアスのすぐそばにあった柱を碎きながら、アークデーモンの一振りは彼に当たることなく空を切った。

（行ける。これなら行けるかもしれないな！）

一瞬だけ、グロリアスは上手くいく回避に勝利を確信し、油断した。そのせいで、スライディングの体勢から前方へと走ろうという姿勢になるのがわずかだけ遅れたのだ。

対するアークデーモンのシミターは、いまだ空を切ったままであり、グロリアスへと振り下ろすにはまだ若干の猶予があった。だが、悪魔の持つ武器は曲剣だけではない。人間よりも遥かに優れた力を有する腕。それですら、鍛え上げていない者にとっては致死の攻撃となる。

そして、グロリアスは防御そのものを上げる着衣スキルを上げていない。なぜなら、彼が装備する物乞いスキルをブーストする防具は、ほとんど防御力がないからだ。言ってしまうえばスキルがあがるだけのただの布切れ。そんな物を着ながら着衣を上げてはスキルの無駄だと判断し、必要になる数ポイント以外はふっていない。

一撃死。それが今のグロリアスを待つ未来だ。

迫り来る破壊をもたらすであろう赤い腕に、彼の脳裏に敗北という言葉がよぎった。

負ける。それは、ごく当たり前に予想していた結果だし、たった一人でここまでこれたことを誰もが褒め称えるだろう。彼自身もボスと対峙できただけで出来すぎだと思っている。グレーターデーモン地帯を波乱も無くすぐに突破できたという行き過ぎた幸運が無ければ、すでに彼は死に戻りして絶品な料理に舌鼓をうっていたことだろう。

しかし、ただの幸運だと分かっている、グロリアスは諦めていなかった。

最後まであがいて、それで負けたい。なら、ここまで導いてくれた運に賭けてみよう、彼は一つ心の中で念じた。

VRという物を使ったゲームで、メニューを開いたりコンディグを設定したりするには、二つ手段がある。

口頭で言うか、心の中で思うのか。

彼の実行したコマンド。それはこのゲームの特色であり、職人プレイにこだわる者たちを集めた大きな要因。

マニュアルと、オート。

すなわち、自力回避が無理ならオートでの自動回避に賭ける、ということ。

そして、攻撃が当たる前に、グロリアスが実行したコマンドは正確に完了された。

それと同時に彼の身体は通常では不可能な動きをし、高く高く舞

い上がり――。

「さて、旦那」

――彼をアークデーモンの頭上へと運んだ。

グロリアスは集中を発動させながら、アークデーモンの頭の上で告げる。

彼が使い続けた愛用のスキルの実行を。

あるパーティが目撃し、その時に撮影したという動画があるとある掲示板で話題の的になっていた。合成だといって信じない者。こんなことが可能なのだと関心した者。反応は様々だが、一つのスレッドが埋まっても尚動画の話題が終わることは無かった。

問題の動画、そのタイトルは“物乞いVSアークデーモン”。

誰もが動画を見るまではただのボコボコに負けて終わるネタ動画だと思っていた。しかし、全てのプレイヤーの予想を裏切り、物乞いはアークデーモンの攻撃をするすると避け、アークデーモンの頭の上に颯爽と飛び乗った。誰もがいつの間にか手に汗を握っていたが、その後に頭へと抱きついて物乞いをし始め、おまけにアークデーモンから金やアイテムを貰ってしまうという光景に多くの人は腹筋を引きつらせた。

不可能を可能にしてしまったこの人物。彼が一体誰かという疑問は無かった。

物乞いを上げているモノ好きは少ない。その中で、そこまであがっている変人は色んな意味で有名な男、ただ一人。

動画を掲示板で知った者。噂を聞いてみてみた者。多くのプレイ

ヤーは彼を賞賛し、一つのあだ名をつけた。

K i n g o f b e g g a r .

物乞いの王、と。

01・主と呼ばれた男（後書き）

というわけであえて物乞いスキルで最強を目指した変人グロリアスのお話でした。

この後に弱体化されるかどうか、それは運営のみぞ知る。

ここまで読んでいただき、まことにありがとうございます。

02・穴倉の主・上

ザク、ザクという音が洞窟に響く。時折それに混じってガキンという音がすること、そこに金属があることを音を出している主へと伝える。

その音と、勘のみでただひたすらに洞窟を掘り進む小さな男。額に刻まれた無数の皺と、口元から胸まで届く豊満な白いひげが、壁へと取り付けられた松明により照らされている。

ドワーフの探掘士コルンド。スキルがカンストし、より良質な武器や鎧を自らの手で作るうとする鍛冶屋ならば、彼を知らない者はいない。

おおよその人間は戦闘なり製造を中心とし、ちよつとした空き時間で探掘や伐採といった採集をするのだが、彼は違う。毎日探掘ばかりをし続け、掘ってきた鉱石を鍛冶屋などの必要な者へと売る。そうしたらまた探掘を始める。1人辺り1キャラしか作れないというこのゲームにおいて、そういった遊び方をする者は極めて稀だ。

スキルの合計値がマックスまで行っている者が新しいことをしたのであれば、上げているスキルを下げて他のスキル上げるか、かなり高額なレアアイテムである封印石というアイテムを使用してスキル値を移しておくくらいしか手段がない。もっとも封印石は1個辺りスキル1つしか移せないということもあり、大量のスキルを保存しようとする金がいくらあっても足りなくなる。

つまり、ひたすら掘ってばかりの彼が持つてくる鉱石は、鍛冶屋にとつては貴重なお宝といえなくもない。

何しろ良質な鉱石という物は岩肌をちよつと掘って出てくるものではなく、それなりに掘り進めなければいけないのだから、コルンドのように探掘をメインにしている変わり者でなければ、量を集めることは難しい。

かといって普通の質の物で作ると、今度は戦闘を中心に行っている

者がもつと良いのは無いのかと云ってくる。

そんなわけで、製造人達は今日も彼の鉱石を待ちわびている。

（さて、そろそろ帰るとするかろう）

鉱石で満杯になったアイテム欄を満足げに眺めながら、コルンドはツルハシを杖代わりにし、ふうと息を吐き出した。

一息ついた後、利便性のために取得した次元魔法から最寄の街へと戻るための魔法を起動させる。するとたちまち彼の周囲に青白い光が渦巻き、数秒後にコルンドは洞窟から姿を消した。

あとは無人となった洞窟だけが残り、時間経過により崩落してしまえば彼がひたすら掘った穴は痕跡すらも残らずに消滅する。

もしもこの仕様が無ければ、コルンドが掘りまくったおかげであちこち地盤沈下しているか、あるいはドワーフの地下王国でも出来ているだろう。

巨大な防壁に囲まれ、石や木はもちろん、中にはレンガで出来た建物が規則正しく並ぶ町並み。広場には料理に限らず、様々な物が並ぶ屋台の数々。コルンドのいる大陸で一番最初に作られた大きな街ファストラーデ。そのいつも通りな賑やかさを尻目に、コルンドは路地裏へと歩を進めた。

彼が入った路地裏の一番奥。そこには一人の鍛冶屋がいる。コルンドはその彼女に鉱石を売りにきたのだ。

彼女とはそこそこに付き合いが長く、採掘が終わると必ず一番に売りに行く。特に鉱石を売ると約束をしたわけでもなく、頼まれたというわけでもないのだが、どうせ売るなら知人に喜んでもらえる方が彼としても嬉しい。

「おう、百合根。元気しとるか？」

いくつかの曲がり角を曲がり、人っ子一人いない寂れたところまでくると、そこには屋台のようなものではなく、布を広げてその上にアイテムを置いてただけという露天が一つだけあった。

その露天を出しているショートカットの女キャラへとコルンドが声をかけると、頬杖をついたままコルンドへと目を向けた。

「ああ、コルンド。元気と言えば元気だけどさ、見ての通りわたしの店は閑古鳥が鳴いててね、そういう意味ではあんまり元気ないかも？」

「そりゃこんな路地裏で屋台を出してれば当然じゃろ。折角良い物扱つとるんだから広場で出せば良いものを」

「いやいや、やっぱり名店は隠れてなきゃ！」

「その気持ちはわからんでもないのう……」

彼の友人である百合根はなかなか腕の良い鍛冶屋なのだが、そのこだわりのせいで売り上げはいささか寂しい。それでも彼が毎回鉱石を持ってくると喜んで買うのだから、彼女の店を探し当てる者は意外といえるのかもしれない。

「さて、今日はこれくらい採ってきたのだが、いくらで買うかね？」
「こりゃまた、随分と採ってきたこと……赤鉄、黒鉄、銀に霊銀、それに龍眼鉱まであるし、おまけにこの量。どれだけ掘ってたんだか……っと、ちょっと待ってね。今計算するから」

百合根はアイテムの相場を書いておいたメモ帳ツールを呼び出し、それと一緒に電卓ツールを呼び出した。

コルンドのカバンに入っているアイテム相場を一つずつ調べなが

ら、電卓の数字をどんどん増やしていく。

「っと、これくらいかな？」

電卓をくると裏返しにし、コルンドへと買い取り金額を提示。彼はドワーフ族自慢のあご髭を撫でながら、百合根が出してきた数字を見つめた。

「ふうむ、そこから10%ほど安くつてとこじゃなあ」

「いやいや、それは悪いってば。いっつも安く売ってくれてるし、たまには適正価格で買い取るよ」

コルンドは、百合根に売る時は必ず相場より安く鉱石を卸す。なぜかといえば、別に彼女とお近づきになりたいとかそういうのではなく、それなりのメリットがあるからだ。

「なに、また近いうちに研磨の結晶を売ってほしいところだな。ギブアンドテイクっていうヤツじゃよ。それにツルハシの修理もお願しいから」

研磨の結晶。プレイヤーの中でも、大規模なギルドでなければいけないような危険地帯の敵がドロップするアイテムであり、アイテムの最大耐久を回復させる効果がある。なかなか手に入らないような業物に使う高級なアイテムだ。

一般的なプレイヤーは並の武器を最大耐久がある程度落ちるまで使い込み、厳しくなってきたら新しい物を買う方が安上がりなため、研磨の結晶を使うことはない。使用する者といえば、強い装備をして強敵と戦う必要のある者。つまりは研磨の結晶を取れるような者達くらいであり、その辺の屋台に置いてあるわけもない。稀にあってたとしても、屋台の賑やかしなのか売るつもりのない値段がついて

いる。

それをコルンドはツルハシに使う。

入手困難な完全ハンドメイドの超級品でもなく、良い物ではあるがいたって普通のツルハシの耐久を回復させるためだけに、百合根から結晶を購入する。

これがいくつがあるメリットの内の一つ。

「んー、こっちとしてはコルンドのためなら、研磨の結晶の一つや二つ喜んで売るけど、っていうか譲るけどさ、何か申し訳ないなあ」「よいよい、金はきちんと払う。それに、いざとなったら力を貸してもらうからの。そういう意味でもただ単に安く売っているわけではないのだから、気にせんでくれ」

「そんなこといっても、力を貸してほしって言うてきたことないじゃない。欲がないっていうか、なんていうか……」

「わからんぞ？ その内無茶苦茶なことを要求するかもしれん。たぶん無いがな」

「もう……何か困ったことがあったら、すぐに言うてね。無茶苦茶でも良いから」

「うむ、そのときは頼りにしておるよ」

コルンドは百合根へと鉾石を売却し、ついでにちゃちゃっとツルハシの修理をしてもらうと、鉾石の買取をしている者が多い広場へ残りを売却するために来た道を引き返していく。

広場に戻り、待っていましたとばかりにコルンドに声をかける鍛冶スキル持ち達へと、不公平にならないようにと平均的に鉾石を売り、彼の所持金はかなり増えた。

しかし、コルンドは金を余り使わない。

研磨の結晶は高いとは言え、頻繁に使うものではないし、修理は当然安い。これまでに彼が大金を使ったのは精々家を作るための土地の権利チケットを買った時くらいのもの。それ以外には飲み物や食事といった消耗品を買う程度だ。必然、コルンドはとてつもなく金を持っている。日々採掘ばかりをして使っていないのだから、むしろたまっていないほうがおかしい。

そして、どうせたまっていくばかりで使い道が少ないのだからと無駄に良い食べ物をいつも買っている。

例えば龍の肉の中でも特に美味いと言われている部位を使ったドラゴンのステーキや、尻尾を使ったテールスープ。空の王と呼ばれる大鷲型のユニークモンスター“白尾のグウィン”の焼き鳥だとか、その卵を使いたいくつもの卵料理やデザート。どれもこれも食べるに強烈なバフがかかるアイテムであり、日常的に使う物ではない。だが、現実では食べられないような物を好きに食べられるのがこの世界の良い所。そこに金をかけずにどこに金をかけるというのか、そう言わんばかりに彼は広場の屋台を一つ一つのぞいては料理を購入していく。

ひとしきり買い物を楽しんだコルンドは、自宅に帰るために帰還用の次元魔法を発動させる。

街に戻るために使ったものではなく、設定された場所に戻るための魔法だ。

戦闘で有用な魔法もあれば、移動関係の便利な物まである次元魔法は当然人気であり、上げるのは他のスキルと比べて倍近い時間を要する。他にも刀剣や鍛冶といった人気スキルも次元と同じ程度の時間が必要だろう。

詠唱が終わり、コルンドの身体の回りに渦を巻いている光が最高潮に達すると、シュン、という音と共に彼の身体は瞬時に設定されている場所へと帰還する。

そしてコルンドが目を開けると、いつもの見慣れた風景が目飛び込んできた。

木製の壁に、値の張るオークという木で作られたテーブルにそれとセットの椅子。

ここは彼の自宅。折角だからと無駄と言って良いほどに高い素材を使って木工職人に作ってもらったものだ。とはいえ、家そのものはさほど金のかかる物でもなく、本当に高いのは家を建てる為の土地の権利チケットのほうだ。何しろNPCしか売っていないのだから安くする方法なんて物は無く、運営側にとって丁度良い通貨回収手段になっている。

コルンドはあまった通貨や、今は食べない料理をチェストにしまつと、待ってましたとばかりにテーブルに料理の数々を並べ舌鼓を打つのだつた。

（さて、行くとするか）

と、空腹度が上限値になつても尚食べたせいで満腹な腹をさすりながら、コルンドはガタリと音をさせながら椅子から立ち上がった。装備はこげ茶色の簡素な普段着の上下とツルハシのみ。アイテム欄にあるのも予備のツルハシが1本と途中で食べるための少しばかりの食料だけ。

採掘士なら誰でもコルンドのようにカバンを可能な限り軽くする。戦闘をする人間であれば回復関係や食事などを持つていたりするが、採集をする者は一度に持つて帰れる量が最も重要であり、そのためなら途中で腹が減つても我慢する者は多い。それは彼も同じことで、食料が無くなつてからは空腹を我慢しながら良質な鉱石としようばい物を交換し続けることになる。だからゲーム上の満腹ではな

く、精神的な満腹になるまで食事をとったのだ。

コルンドが家から出ると、やはりそこもお馴染みな光景。

周囲どこを見渡しても、目に飛び込んでくるのは灰色。南側には外へと続く通路。

岩を掘って掘って掘りまくって作られた巨大な空間に、彼の家は建っている。

コルンドにとっても不思議なことだが、この世界の地下は崩落する場所と崩落しない場所の二つがある。いったいコレにどういう意味があるのか分らないが、何の意味もなくこうしている訳も無いだろうと考え、その内くまなく掘って調べてみるのも良いだろうなと彼は思っている。だが、当分は採掘をしていることだろう。

手近な壁をなんとなく選び、狙いを定める。そしてツルハシの先端を突き刺す。すると刺さったツルハシを中心に無数の亀裂が入り、あとはそれを崩していく。

力が必要なように見える採掘だが、流石は採掘カンストの力なのか、壁はサクサクと軽快な音を奏でながらどんどん崩れていく。砕けて石となった欠片はふわふわと地面スレスレの位置で浮かび、自分はアイテムだということをコルンドへ伝えるのだが、彼はそれを拾うことは無い。なにしろ用途も少ない上にとてつもなく安いものだから、拾うだけ時間の無駄になる。彼が狙うのは鉄よりも上の物。例えば炎系の魔力で変質した赤鉄と呼ばれる鉱石であったり、変質のし過ぎで魔力を通さなくなったといわれる黒鉄であったりだ。もちろん鍛冶用としても彫金用としても使える金や銀も拾っていく。

サクサク、ザックザックと砂でも掘っているのかと言わんばかりに掘り進めるコルンドのツルハシが、ガキンツと何か硬いものに当たった。

彼はそれを無理に掘ることはせず、何かがある場所の周囲を丁寧に崩す。

すると、灰色の岩に混じって薄っすらと黄緑がかった銀色の部分が出てきた。

（ほ、霊銀とは幸先良いの）

採掘開始して間もなく、しかも一番最初に出てきた思わぬ貴重な鉱物にコルンドはにんまりと笑みを浮かべながら霊銀の採掘を開始した。

霊銀。またはミスリルとも呼ばれる高価な鉱物。これは魔力を良く通し、なおかつ増幅させるという設定があり、実際に職人達がミスリルを用いて作った武器は設定通り魔法系のダメージにプラス補正をかける。逆に防具にしてしまう魔力の通りが良いせいで魔法への耐性が低くなってしまうのだが、物理防御などは霊銀本来の硬さなどもあってそこそこ高い。デメリットは確かにあるものの、薄っすらと黄緑がかった銀色という見た目の良さもあって人気のある鉱物のひとつといえる。

コルンドは掘り出した霊銀の塊をカバンへと入れ、ほくほく顔で再び洞窟を形成していく。

彼の採掘は非常に気まぐれだ。

効率よく鉱石を得ようとする他の採掘士と違い、コルンドは適当といっても良いほどめちゃくちゃに掘り進める。

時には真っ直ぐ、時にはくねくねと蛇行しながら。かと思えば、大きな部屋を作るかのように掘り始める。

何故彼はこんな掘り方をするのかといえば、特に理由は無い。

何となくこつちを掘りたいから掘り、何か違うと思えば別の場所を掘る。自由気ままに採掘生活をしたいからこそ、効率は求めずに好きにやろうと考えた結果こうなったのだ。

もしも製造をやる合間に採掘をやるのであれば、彼も他の採掘士のようにより効率の良い採掘方法を行っていたかもしれないが、採

掘しからないのであればむしろ効率というものは邪魔だった。コルンドは採掘を面白いとおもっているからこそ、それを上げる。だから効率を求めて作業的にしてしまうのはもったいない。そうやって良い鉱物を掘り出しても、得た時に感じる喜びはきつと半減してしまふことだろう。そう彼は思った。ゆえに、彼は自由気ままに勘を頼りに掘り進む。

幸先の良い出だしに、次なる鉱物に期待していたコルンドだったが、何事も全てがうまく行くわけがなかった。なぜなら、背後で何者かがやってくる音が反響によって彼の耳に聞こえてきたからだ。

人の多い場所からかなり離れた僻地にある彼の家に客がくることは少ない。その少ない訪問者も、大抵は百合根のギルドの人間であったり、同じように採掘をメインにしている変わり者であったりだ。その誰もが、必ず彼へと事前に連絡を入れてからやってくる。とすれば一体誰だろうか。コルンドはそう思いながら背後へと振り向き、曲がりくねった道を歩いてくるであろう人物を待った。

そしてその姿が現れた瞬間、背筋が凍りついた。

機動性を重視した革製の鎧は良い。手に持っている長い直剣も良い。

彼の背筋を凍らせたのは、目の前の人物の頭上にある物。

赤い名前。PKである証拠。

「探したぞ、じいさん」

「な……さ、探した？ い、一体ワシに何のようじゃ」

ただ迷い込んだわけではない。お前を殺しにきた。暗にそう言うPKの男に向かって、コルンドは焦りを隠せないままに問いを投げた。

コルンドの焦りを見逃さなかったのか、赤い短髪のPKは静かに笑い、彼の疑問に答えた。

「上に言われてな。殺しに来た」

「ち、ちよつと待て、今のお前さんのギルドは中立は狙わんのでは無かったか？」

赤い名前の男の鎧には、有名なPKギルドの紋章がつけられている。

そしてそのギルドは中立プレイヤーへの攻撃を制限し、PKとPKKでの対人戦、あるいは攻城戦を楽しもうという方針を掲げていることは誰でも知っていた。あくまでも対人をするためだけの赤ネームであり、むやみにPKすることをギルドリーダーが嫌っていた。では何故このPKは自分を狙ったのか。

コルンドには心当たりがあった。

百合根の所属するギルド。この大陸でも有数の精強さを誇る廃プレイヤーが集うそのギルドは、PKKの集団だからだ。それに率先して素材を売っている自分も、彼らの仲間だとみなされたのだろうと、少し考えてみれば合点がいった。

「知りたいなら教えてやる。理由は二つ。一つ目、PKKギルドに関わった者もギルドの一員としてみなすことになった。二つ目……」
「くっ……」

コルンドの導き出した結論通りのことを言いながらも、剣を抜き放ちジリジリと迫り来るPKに、彼はツルハシを両の手でしっかりと握り締め迎撃の構えを見せた。

「……中立へのPK解禁」

「ば、馬鹿な！ お前のところは対人がやりたかっただけではなか

ったのか!？」

自分のことはともかく、何故中立にまで攻撃することにしたのか。コルンドには分からなかった。

ただ分かることは、魔法での帰還も詠唱時間を考えれば不可能であり、どこにも逃げ場がないということだけだ。

「なに、簡単なことだ。上が変わった。ただ、それだけのことッ!」
「ぬうッ!」

PKは言い終わると同時に袈裟懸けにコルンドへと斬りかかる。それをツルハシでもって受けようとするも、戦闘面のスキルに乏しいコルンドはそれを完全に防ぐことは出来なかった。

わずかながら肩を斬られ、視界の左上に表示されているHPバーが瞬時に被ダメージを反映し、減っていく。

微かに受け流されたものの、そんなことは関係ないと体勢を崩すことのなかった赤髪が次の攻撃のモーションに入る。袈裟懸けに斬ったため右へと流れている剣の先を上げコルンドへと向ける。そしてそのまま軽く引き狙いを定める。ごく短い時間のうちにその動作を終える。

刺突。このダメージを上げるためにより刃先を鋭利にするという改良を加えられている直剣の利点通り、男はコルンドの胸元めがけて突きを放った。

しかしコルンドは刺突が来ることを放たれるよりも早く察知すると、その身をひねりすんでのところでそれをかわす。

刺突攻撃の弱点。それは隙の大きさにある。

ならば今しかない、とコルンドは身体を正面に向きなおすと同時にPKの脇をすり抜けるべく、足を踏み出した。

「はッ!」

だが、脇を抜けられると思った次の瞬間、腹部への強い衝撃と共に背後の岩壁まで飛ばされ、背中をしたたかに打ちつけた。

「ぐ……格闘、か」

横をすり抜けるようとしたときに彼の腹部を襲ったモノの正体。それはヒザだ。

このPKは刀剣とは別に、超近距離用に格闘スキルを上げていた。ダメージとリーチにはやや不安があるものの、ノックバックやスタンといった多種多様な追加効果を誇るスキル。それが格闘である。

（ここまでか……）

コルンドは覚悟した。狭い通路での刺突攻撃の強さというのももちろん、それに加えて格闘まである相手に勝つことは、どうやって出来ない。

「すまないな」

そう微かなPKの言葉が聞こえると同時にコルンドの視界は赤く染まり、次いで視界が暗転した。

死んだことによる復活地点への転送が行われたのだ。

（まさかPKがくるとはもう）

まあ良い。どうせのんびりしていれば衰弱も治るのだ。復活拠点である自宅に戻されたコルンドは、突如視界にあらわれたログに驚愕した。

『スチールピッケルを奪われました』

「そんな、まさか……」

すぐさま死体付近を見るためのサブカメラを起動し確認してみると、確かにPKはピッケルをその手に持っていたところが映されていた。

「ま、待て！」

耐久が減れば修理し、最大耐久が減れば回復させ、長く使い続けてきた愛用の品。それを持っていこうとするPKよ、それだけはやめてくれと、意識するよりも早く口が勝手に動いていた。

それがたとえ聞こえていなかったとしても、それでも彼の口は自然と言葉を発してしまう。

「頼む、待ってくれ！！」

PKのそばに死体が残ったままだというのに、コルンドはそんなことも忘れて走り出した。その状態では全ての能力値にペナルティがかかり、いかに戦闘スキルがカンストしていようと雑魚にすら苦戦するほどだというのに。

（たのむ、そのままそこにいてくれ！）

PKがいる場所から外までは一本道になっている。それなら帰還魔法を覚えていない者であれば必ず遭遇するはずだと、彼は確率の低い望みにすぎるように走った。

「……また来たのか」

途中、コルンドは広く掘りぬいた部分でPKに遭遇することが出来た。

「頼む、そのツルハシを返してくれ！ 金、金を払う！ だからそれだけは！」

てつきり無謀にもやり返そうとしてきたと思っていたPKは、突然の必死な懇願に面食らいつつも、たったいま奪い取ったばかりのツルハシがこのドワーフにとって大事な物だということを理解した。

「それほど大切な物なのか？」

「そう、そうなんじゃ。それは昔、知人が作ってくれた物なのだ。たかがゲームのアイテム、そう思っていたというのに、いざ無くなってみればこの通り、焦りに焦る馬鹿な爺を笑ってくれ。ただ、それだけはどうか返してもらえないだろうか……」

そういつてコルンドは深く頭を下げた。

PKは無表情ながらも、何かを考えているかのように少しの間だけ目をつむると、手にツルハシを出現させた。

「……ここに置いていく。勝手にもって行くかどうかはお前に任せる」

コルンドの願いが伝わったのか、PKは遠まわしにアイテムを返すと告げた。

「おお、おお……！」

ドワーフは頭を上げ、安堵の笑みを浮かべる。

彼自身も、本当に戻ってくるとは思わなかった。それでももしかしたらと思い、必死に頼んだ。それが功を奏した。

「俺も、似た経験がある。使ってこそ作った者も喜ぶだろうと使い続け、失ってしまった時の何ともいえない辛さ。きつと、誰にでもあることなんだろうな」

そう言っ、PKはツルハシを地面へと落とし、外へと向かうためにゆっくりと踏み出そうとした。

「アース・バインド」

ここにいるドワーフと赤髪のPKとは別の声が突如響いた。

それと同時に、PKとコルンドの足にぐねぐねと動き始めた地面が絡みつき、両者を束縛する。

精霊魔法の一種。攻撃系だらけなこのスキルの中に一つだけ存在する拘束系の範囲魔法だと、PKは声と同時に気付いたが彼の低い魔法抵抗でこれをレジストすることは出来なかった。

表情の無かった顔を驚きに変え、PKは新しくやってきた者がいるであろう方向へと目を向けた。

「ヒヒッ、やっぱり裏切ったねエ。中立へ攻撃することに最後まで反対してたお前のことだ、後をつけてりや絶対裏切ると思ってたよ……ヒヒヒッ」

コルンドは新しく現れた者へと軽く身体をよじって顔を向けると、やはりそこにいたのは赤い髪の男と同じくPKだった。

「チッ、相変わらず気持ち悪いロールプレイだな。マルレノ」

「ヒヒッ、何とでも言えよ。あ、そうそう。そのツルハシはきちんとボクがNPC商店に売却してあげっから、感謝しろよ？ ヒヒヒッ、ヒヒッ」

「ま、待て！ それは――」

趣味の笑い声をあげながらツルハシへと近づいていく新しいPKに、やめてくれと伝えようとしたコルンドの言葉は最後まで紡がれることは無かった。言い終わるよりも早く、PKは敵の詠唱など防ぐ呪文。サイレントという名称のソレをコルンドへかけていた。

「いやあ、さっすが採集しかやらないだけあって、オートでも簡単にかかるねエ。んじゃま、ボクはこの辺で帰るからネ。ゴミの処分は任せなさいナ。それと、このことはきちんとリーダーに伝えておくからさ、安心すると良いヨ」

「ま、待て！　せめてそのツルハシだけでも返してもらっぞ！」

自分が返すと判断した物なのだから、ここで持つて行かせるなんてことは赤髪は到底納得出来ないものだった。これならば、捨てたのだから捨つのは自由などと格好つけずに、おとなしくトレード渡しておけばよかったと後悔しながら、PKのマルレノへと声を張り上げた。

「無理無理、遠距離攻撃も無い上に魔法抵抗も低い脳筋が、拘束された状態で何か出来るわけないジャン？」

ニタニタと笑いながら、PKは姿を透明にした。

隠密や自然同調と同じ効果を持つ姿隠しの魔法を扱うこのPKを追いかける術は、コルンドにも、赤髪にも無かった。

「全て俺の責任だ……本当に申し訳ない」

赤い髪の男は、コルンドへと深く頭を下げた。魔法タイプのPKが去ってから、二人の拘束はすぐに解けたために両者とも自由の身。あのPKは拘束時間を正確に把握出来ていたからこそ、悠長に会話をするなんていうことが出来たのだ。

「いや、お主が悪いことはあるまいて……しいていえば、無くしたくない物を持っておったワシが悪い」

「そんなことは無い、悪いのは俺だ」

「だから又シは悪くないと……まあ、運が悪かったということかう……」

がつくりと肩を落とすコルンドに、PKは声をかけることが出来なかった。

元とはといえば、中立に攻撃をしかけることに対して嫌々だったとはいえ、ギルドを抜けたくないがために目の前の男をPKをした自分の責任だ。なら、責任を取ろう。そう考え、PKは外へと続く洞窟に目を向けた。

「何を考えておる」

PKがじつと出口へと続く通路を見ていることに気がついたコルンドは、彼へと声を投げかけた。

「……」

「やつらのアジトに行つて暴れる。違うか？ 元々対人派と昔ながらのPK派で別れてたようじゃしな。違つていても似たようなことをしようとは思つているじゃろ」

「……せめてアイツらを数人やれば気も晴れるかと」

PKの言葉を聴き、コルンドはため息をついた。

「そんなことで気が晴れるわけないだろうに……それに、別にお前さんを恨んでなんておらんよ。頭にきていないわけではないがな。じゃが、それよりもあの気色悪いPKの方がよほど頭にくる。いうに事欠いてゴミじゃと？ そりゃデータでいえば大したことはないが、ゴミは無いとおもうがな……！」

「なら、やはり俺が」

「待て待て、それではお主がアイテムを落とすだけで、全然面白くないじゃろが」

歩き始めた赤髪を、コルンドはいいからちよつと待てと制止する。確かに奇襲を仕掛ければ数人倒す程度のことは出来るかもしれない。だが、それでは自分は面白くない。彼はそう言った。

「なら、PKKに頼むのか？ 確かにやつらなら徹底的にやってくれると思うが」

「ま、PKK達の手を借りはするが、全部を丸投げするの………そうじゃな、ワシらで一矢報いてみるのはどうかな？」

ふふん、としたり顔でいうドワーフの考えがPKには分からなかった。PKKの手を借りるのは分かるが、その前にヤツらにリベンジするとはどういうことだろうか。それも、ワシらと複数形になっているということは、このドワーフもPKギルドとの戦いに参加するということだ。しかしこの男は採集専門なのだから、戦闘なんて出来はしない。たった一つであれば比較的早いかもしれないが、まともにやるうとするならば長い時間をかけなければいけないのだから、と。

「さて、ここで質問じゃ。主はここに来るまでの道をどう思った？」
「は？ ん、道か……そうだな、やたら入り組んでいるは行き止まりはあるは、こんなところに家なんてあるのか？ と思ったな。まるでダンジョンのよう——ああ、なるほど。そういうことか」

なるほど、やりたいことが分かったぞ。そう言うように、男はニヤリと笑った。それを見たコルンドも、やはりニヤリと笑い返した。

「この洞窟はな、行き止まりは複数あるが、出入り口は一本しかない。なら、ここまでの道をダンジョンにしまえば、それはもう楽しいことにならんかのう」

「いやいや、それは実に楽しそうな提案だな。となれば、上げるスキルは一つ、といったところか」

「うむ、協力してもらうぞ？」

「まさか、赤ネームが白ネームに協力することになるとはな」

赤髪のPKは肩をすくめながら、ドワーフの提案を呑んだ。

こうして、二人は一旦手を取り合いPKギルド達と立ち向かうこととなった。

02・穴倉の主・下

作戦を思いついてから、二人の行動は速かった。

コルンドはすぐさま街へと飛び、必要なアイテムを買い漁り、足りない分は百合根達のPKKギルドの職人へと依頼した。

これを受けたギルド側の職人は、PK達との闘争に巻き込んでしまったことを詫びながら、彼の始めての頼みともあって張り切ってアイテム作成を始めた。

自宅に戻り、色々と準備をしながらも、恩を売っておくことはやはり大切じゃないと笑うドwarfに、元PKギルドの男グレースは、彼の頼みを最優先にしてPKKギルドが動き始めたということを聞き、驚いていた。

この大陸での有数の規模を誇るPKKギルド。その彼らがただ一人の採掘士のためだけにほとんどの者が動いている。アイテムを量産し続ける職人達もそうだが、素材が足りないとすれば戦闘が出来るものが調達しにくい。色々やらなければいけないこともあるはずだというのに、それはグレースにとって異様ともいえる光景だった。

そして、必要なものがあらかたそろうと、二人はスキル上げを始めた。

コルンドはで対PK用のスキルを一つだけ。

グレースはいくつかある弱点を一つだけだが克服出来るスキルを。時にはPKKギルドの面々に手伝ってもらい、またある時は二人でモンスターに突撃をかけながら、使える時間を惜しげもなく使い上げていった。

「しかし、これでよかったのかのう」
「何がだ？」

短くも、長く感じたスキル上げを終えたコルンドが、ぼそりとつぶやいた。

「結局、スキル上げにしろ対PK用のアイテムにしろ、百合根達に頼ってばかりというところが何だか申し訳なくての」

「ああ、そういうことか。なに、借りはたまには返してもらうものだ。貸しっぱなしってのは貸してるほうは良いかもしれないが、借りてる方は居心地が悪いからな」

「そういうもんかの」

「そういうもんだ」

岩の中にあるコルンド宅にて、雑談をしながら茶をすすする二人。

いまだ名前の赤いグラスは普通の街ではガードに狙われてしまうため、買い物ですら命がけになる。かといってPKが作った街ではPKに狙われる。大規模なPKギルドのルールを破ったということとは敵対したことに等しい。グラスの知る新しくギルドのマスターになった人物は、そういう者。ゲームをゲームだと思わないような人物だった。彼に残された道は適当にモンスターや赤ネームのNPCを倒してゆつくりと傾向を変えていくか、PKを殺して早めに中立に近づけるかのどちらかしかない。

つまり、時間のない今は赤ネームから他へと変更することも出来ず、買出しはもっぱらコルンド任せとなった。

「では、行こうかの」
「ああ」

食後の茶も飲み終わり、彼らは立ち上がった。
ただ頭にきたという理由で始まった、ささやかな復讐。
何度でも復活出来るゲームでの、小さなリベンジ。

森の中、木々に隠されているかのようにひっそりと存在する洞窟。
その入り口には三人のプレイヤーがいた。マルレノと、その部下二人だ。

そのマルレノは、ついにグレースを追い出すことが出来たために、飛び上がりたい気分だった。ギルド内でもプレイヤースキルが高いことで知られていたグレース。それがいなくなったことにより、ようやくリーダーの方針に対して口を出せるだけの立場になることが出来たし、立場の良くなった中立へも攻撃派である自分にすり寄って来るやつも出てきた。そう考えただけで小躍りしたくてたまらなかった。

「ヒヒッ」

いまだきギルドで幹部だとかくだらしない。そう言っていたグレースはどうだ。ギルドの方針に逆らって追放され、今じゃ買物すらロクに出来ない体たらく。それに比べて自分はどうか。今じゃギルドを構成する幹部の一人になっているし、パシリも出来た。とにかくマルレノは、ようやく目の上のこぶを追いつけて嬉しくて嬉しくてしかたがなかった。

そして、今日もドワーフの家へと向かう。

ここしばらくは自宅に近寄っていなかったらしいが、引越しさえしなければ必ずヤツはあそこに戻ってくる。もしかしたらグレースも一緒にいるかもしれない。だとすれば好都合。ロクに戦闘スキルのないであろう採集士と、グレースが手を組んだとしても脅威では

ない。いくらヤツが近接同士での1vs1では無類の強さを誇るとはいえ、魔法抵抗が低いうえに、こちらは複数。勝ち目なんてあるわけがない。そうマルレノはほくそ笑みながら洞窟の入り口を見つめた。

「おい、お前ら先いけ」

「は、はい」

「任せてください」

最近マルレノに近寄ってきたギルドに入りたての二人へと指示を出し、先に行かせる。これで曲がり角の先でグレースが待ち構えていても安心出来る。それどころか簡単に倒せるじゃないか。マルレノは下手クソだか盾としては使える役立たず二人の背中を見ながら、口から漏れ出る笑いを隠そうともせず、洞窟を進んでいく。

「しつつかし、ドワーフのジーさんまいますかねえ」

鉄製の全身鎧に身を包んだ男と、金が無いのか銅で作られた安いハーフプレートの鎧を着込んだ下っ端が、マルレノへと声をかけてきた。

「さーねエ、ボクはグレースをやればそれで良いし、ジジイはどうでも良いヨ」

「グレースのヤロウが出てきたら、お願いしますよマルレノさんっ」

「そうそう、俺達じゃ壁をするぐらいがやっとですし」

つい先日までグレースさんグレースさんと親しげにしていた二人は、あるうことがグレースのヤロウと口に出した。それがまたマルレノの心をくすぐり、心地よさを感じさせた。

「まあ、安心して任せ——」

そういつた瞬間、シュンツと音を立てて左右から何かが飛んできた。

「うあつ！」

「つてえつ！」

飛来物に驚き、前に行く二人は声をあげた。

今飛んできた物の正体、それは矢だ。周囲に何かいるわけでもなく、となればこの矢の正体はたった一つしかない。

今までには無かった畏の存在に、マルレノは少し驚いた。まさかこんな短期間に畏スキルを上げていたのか。いや、確かに金持ちだと言われている爺ならやってやれなくはないかもしれない。PKKギルドとも繋がりがあるということを考えれば、その可能性はもつと高くなる。何しろ職人を大勢抱えている上に作成方法のわからないアイテムのレシピをいくつか所持しているのだから。そう考えながら、唇を噛んだ。

しかし、まさかPKを撃退するただけに对人用の畏なんていう高級品を持ち出してくると思わなかったが、マルレノはここで退くつもりは毛頭無い。むしろ、この畏を突破してぶち殺してやりたいと考えていた。

「マ、マルレノさん。畏がなんて物があるなら帰った方がいいんじゃない」

「そ、そうですよ。俺ら畏探知ありませんし……」

「良いから進め。回復アイテムあんだろ？ ヒヒッ」

撤退は許さない。暗にそういうマルレノに二人は従うしかなかった。いまどき流行らない上下関係の強いギルドに入っている以上、

文句を言える立場ではない。最近になって脱退者が増えているというこの理由がようやくわかった二人だった。

「はい……わかりました」

モニタ越しではなく、直接対面して会話をするVRでのデメリツトがコレだ。外見がアバターになっているとはいえ、実際に対面して話しているわけだから、中の人の普段の気の強さというものがよく出てしまう。この二人はモニタ越しでは強気だが、本来の性格でいえば気の弱い方である。

しぶしぶ、といった風に歩き出した二人だが、すぐにハーフプレートの方が何かを踏んづけた。

シュオン、という音と共に、周囲を取り囲むようにモンスターが現れた。

対人トラップの一つ、モンスター召喚罠。これを踏むとその周囲で沸くモンスターを数匹出現させるのだが、彼らがいる洞窟のようにモンスターが出ない場所で使うとゲーム内に存在するモンスターをランダムで出現させることが出来る。

そして召喚されたのは、きちんと戦闘に特化した者が二人でようやく倒せるというファイアドレイクだった。

「げっ！」

「クソッ、こんな狭いところでファイアドレイクとか出すんじゃないえヨ！」

マルレノは毒づきながらも、目の前に出てきた障害物を排除するために詠唱をはじめた。

「はあ……何とかまりましたね……」

そういう全身鎧のPKは地面に座り込み、回復をするために包帯を取り出した。

ファイアドレイクはかろうじて倒せたが、銅の鎧を着た貧乏人の方が死んでしまったことに、マルレノは苛立たしげに舌打ちをした。マルレノはパーティ会話でさっさと戻って来いと伝え、合流するのをひとまずは待つことにしていた。罨があるとなれば、肉壁は多いほうが良かったからだ。

「あの、マルレノさん……」

死んだへっぽこから、離れていても会話できるようにと実装されている念話がパーティ会話で二人へと飛んでくる。

「あんだよ？ いいからさっさとこいって」

「それがその……PKKが入り口にですね……いるんですよ」

「はあっ！？ ってことはアレか、こっちにきそうつてことか？」

「いえ、違っんです。えっと、バーベキューしてます」

「……はあ？」

入り口でワイワイとバーベキューをしているPKKというのがイマイチ連想できなかったマルレノだが、どうせドワーフが頼んだのだろうと考え、役に立たないヤツは置いておくことに決定した。いても大して変わらないのだから、待っていないくても良かったかと少し時間を無駄にしたことに後悔しながら、座り込んでいる鎧の男を足で小突きながら立てと促した。

「もう行くぞ。さあて、PKKに頼ってながら負けたらどんな顔するんだろうな」

「は、はい」

そこからは、罨、罨、罨の嵐。とにかくひたすら回復し続け、両者は奥を目指し続けるが、どんどん減っていく回復薬に、マルレノは馬鹿らしくなり始めていた。

（何だって一人、よくて二人をやるためだけにここまでしなきゃいけないんだ？）

元は彼が行くと言い出したことだが、ここまで大量の罨を仕掛けられるとめんどくさくなってきたのだ。回復アイテムの代金だってばかにならない。よくPKKに倒されているマルレノはあまり金がないのだ。

「あれ、こっち行き止まりッスね」

「チッ、もう良い。今回は引き返すぞ！」

苛立たしげに語気を強め、振り向いた。

そして、その瞬間に何かを踏んだ感触がし、また腹が立った。ガチャンという音と共に、振り返ったマルレノの目の前に竹やりを組み合わせて作られた格子が落ちてきた。

なんだ。設置場所ミスってんじゃねえか。そう思ったマルレノの期待を裏切るように、天井から鈍い轟音が聞こえてくる。

対人用のトラップの中でも特に値段の高い物。その上設置できる場所が限られすぎてて不人気な罨、吊り天井。

そもそも罨自体が罨を感知するためのスキルがあれば見破れてしまいう上、費用対効果が低いために上げている者は少ない。なのに、こんなクソ高い物を惜しげもなく使う馬鹿をマルレノは見たことが無かった。

「お、俺もう無理っす！」

そういつて、一人残った肉壁はHP残量が0になった。

どうする、帰還するか。それとも探索を続けるか。マルレノには選択肢は無いに等しい。だが――。

「ほっほ、どうじゃった？ ワシが仕掛けた遊び道具は楽しかったかの？ もっと仕掛けておくから、精々楽しむといいわ」

格子の向こう側に行き成り現れ、マルレノをおちよくる者の存在で、帰還する選択肢はどこかへ蹴り飛ばされた。

「ぶつつつつつコロス！ ぜつてえコロス！」

マルレノの感情が怒りに傾いたことにより、システムは彼の顔を赤くした。それを見たコルンドは満足げに笑いながら、洞窟の奥へと消えていった。

「ファイア・ストーム！！」

精霊魔法の中級程度のスキルである炎の嵐でもって格子を焼き払い、ドワーフが走っていった方向へと駆け出した。

もはや畏がどうか細かいことは良い。かかったら回復するし、モンスターが出たら何がなんでもぶっ殺す。マルレノの頭にはもうそれしかなかった。

そして、大量の畏にかかりながらも、ついにマルレノはドワーフを追い詰めることに成功したのだ。

「へへ、へへへ……ヒヒッ、クソジジイ、そこはもう行き止まりだぜエ？ どうすんのかな？ なあなあ、どうすんの？ ヒヒヒッ」

追い詰めたことにより、ようやく落ち着いてきたマルレノは、ゆっくりとドワーフへと近づいた。

まだ魔法をかけるには遠い。ただ、後ろからグレースが来てグサリというのも警戒しなくてはいけない。そう考え、背後をチラチラと見ながら、じっくりと近づく。それに何よりも、こうして相手をいたぶることが彼の好きなことの一つでもあった。

「く、うつつ……これまで、か……」

コルンドは諦めたかのように、がくりと項垂れた。

「チッ、ちよつとは抵抗してよオ、ねえねえ、抵抗しようよオ」

ニヤ、とした笑みを浮かべ、マルレノは接近を続ける。

もう少して魔法の射程内に入ることを経験から悟り、赤い宝玉のついた杖を出現させてその先端に炎を灯す。普段は全体的に魔法の効果的底上げする手袋型のものを使用しているが、攻撃に専念する場合は違う。炎系の精霊魔法を底上げする赤鉄と、巨大なルビーを用いた杖を使うのだ。何ヶ月も金策をし続けてようやく買えた逸品。マルレノはこれを何よりも大切にしている。

「ヒヒッ、これで終わりだなア！」

そして一歩踏み出したときに、マルレノはがくりと体勢を崩した。急に地面が無くなったことに彼は驚き、咄嗟に手を伸ばした。

「ぶぶっ」

コルンドは、思わず噴出してしまった。
岩を掘りぬいただけのじめつとした洞窟の行き止まりにある一つの違和感。よくよく見れば、灰色の薄い板を置いてあるのが普通ならば分かったはずだろう。

だが、マルレノはついにその違和感を見破ることは出来なかった。

「畏と言えば、これじゃよ。なあPKさんや」

「て、てめっ！ 落とし穴なんてアイテムに無いだろうがヨオ！」

「はっは、そりゃそうじゃ。何しろツルハシで掘っただけじゃからなあ」

落とし穴。それもただ下に向けて地面を掘っただけの物。コルンドが最後にどうしても使いたかった採掘を駆使した攻撃手段だ。

「んぐ、くっそ！」

穴のふちを何とかつかんでいる手に力を入れ、マルレノは必死に這い上がろうとするも、ドワーフが近寄ってきたことによって自分の未来が見えた。

「ではな、下でお客さんがまっとるぞ」

そういつて、コルンドはPKの手を蹴り飛ばし、穴へと落とした。

痛みはほとんど無いが、強い衝撃を受けたことで地面に叩きつけられたことに気付いたマルレノは、あまりの大きなダメージに赤く脈打つ視界も気にせず周囲を見渡した。

このゲームではどれだけ落下しようとHPが1でとまる。それが幸いし、マルレノは即死を免れた。ただ、随分と落ちてきたせいでHPが1になってしまっている。赤く脈打つ視界はそれを分かりやすく表現しているエフェクトの一つ。

「ヒ、ヒヒ……ヒヒヒッ」

黒い石か何かで作られた部屋。床も天井も、何もかもが黒く、ただ松明の光がゆらゆらと周囲を照らすだけの場所に、モンスターなどではなく一人の男いた。それが彼の視界にうつると、マルレノは思わず笑った。

「待っていたぞ、マルレノ」

「ヒハッ、ヒヒヘッ」

可笑しな笑い声を発しながら、腰を地につけたままの体勢でずりりと後ずさりしながらグラスと距離をとろうとするマルレノに、赤い革製の鎧を着た男は一つのアイテムを投げ渡した。

「回復する時間くらいはやる。さあ、回復して立ち上がれ」

そういいながら直剣を抜き、その刀身は松明のおぼろげな光を反射する。

助けるためにいたのではない。その反射してマルレノの目に届いた光はそう言っている。

「ま、待つて、待つてヨ、ネエ……ほら、同じギルドだった仲じゃない？ 何もお互いやりあうことまではしなくてもさ、ネエ？」

「回復しろ」

「ほ、ほら。これ、この杖。これボクの宝物なんだよ？ 今死んじ

やうと落としちゃうじゃない？　じーさんの大切な物を返してあげたグレースさんなら、分かるよね？　ネ？」

「……回復しないのなら、仕方が無い。名前を白くする糧になってもらおうか」

「ぐ、分かった。回復するから近づくなよオ！」

説得するのが無駄だと分かり、マルレノは回復の薬を何本か飲み干し立ち上がる。

それと同時に――

「アース・バインドオ！」

――グレースへと拘束魔法をかけた。

なんてことはない、魔法の範囲内に近づくまでグレースを接近させ、範囲に入ったところで要求を受け入れるフリをする。そうしたら回復し、一気に動きを止める。それだけで簡単に優勢になる。危機を脱出するためにマルレノが瞬時に考えたアイデアである。

「……」

「ヒヒッ、やっぱ脳筋だよねエ、グレース。これだから馬鹿は困るんだ。戦いつていうのはもつと頭を使わなきゃア。もつとも、敵の言うことを律儀に聞くようなあんたにや無理だろうけど？　クヒヒヒッ」

楽しげに笑うマルレノだが、グレースは無表情を貫いていた。

それをポーカーフェイスを装っているだけだと考え、マルレノは詠唱を始める。

炎の嵐よりも更に強い精霊魔法を使えば、魔法抵抗の低いグレースはひとたまりも無い。なら、使うのは炎系の最高位魔法以外に有り得ない。

この呪文は中級であるファイア・ストームのように無詠唱では発動できない。数秒から十秒程度時間魔力をため、その間決められた言葉を紡がなければいけない。

だが、グラーズはアース・バインドによって拘束されている。勝利、それをマルレノは確信している。

「……」

しかし、グラーズは無言で一步踏み出した。

その瞬間、彼の足に絡みついた変形させられた地面は脆くも崩れ去った。

「へ……？　なんで……まさか、魔法抵抗上げた……？　あれほど、あれほど上げるつもりはないとか言ってたくせに、上げやがったのかてめエ！」

「それがどうかしたか？」

魔法を完成させたマルレノは、かつて言っていたことをあつさりと無かったことにした目の前の人物へと声を張り上げたが、グラーズはそれを平然と聞き流した。

「弱点をフォローできる味方がいない、そんな状態で仲間の援護ありきなビルドにしているわけがないだろう。馬鹿が」

「クソッ、インフェルノ・ブ——」

魔法を発動させようとした瞬間、グラーズは一気にマルレノとの間合いを詰めた。マルレノは魔法を一旦中断させて真後ろへと飛びのく。

魔法は発動寸前で中断しようとも、意図的にこめられた魔力を消費さない限りは詠唱完了状態を維持する。だが、発動させようとす

る時に攻撃されれば、魔法は不発で終わってしまう。それを警戒しての中断。

が、それは悪手だった。

グレースは再びマルレノへと対象との間合いをつめることの出来る刀剣スキル、チャージを使用すると、その勢いのまま突きを放つ。グレースの直剣はマルレノの肩を挟りながら突き進む。

そして柄まで深々と突き刺さった剣はそのままに、空いた左手で次なる一撃を叩き込む。

「はッ！」

掌底をマルレノの口へと打つ。閉口掌へいこうしょうといわれる対象を静寂状態にするスキルがマルレノにヒットし、魔法戦に特化した男は静寂状態になる。

口を強打された男は、言葉を発しようとしても何も出てこない口を抑えながら、ふらふらと数歩後退し、壁に背をつけた。

静寂になった魔法使いほど哀れな物は無く、そのような者はグレースという対人マニアの敵ではない。

「しかし、死体をルートしないとは、やはりPKらしくないのう」

コルンドは茶をすすりながら、目の前に座るグレースへと声をかけた。

あの後、戦意を喪失したマルレノを打ち倒したグレースだったが、その死体からアイテムを奪おうとはしなかった。コルンドが聞いても、「さあ、ただなんとなくだ」というばかりで、その真意を聞くことは出来なかった。

「俺達はリベンジに成功した。後はP K Kに任せてのんびり茶をする。それで良いだろう、細かいことは気にするな」

「全く、頑固者め」

そう言い、二人は再び茶を一口する。

ふう、と思わず出てしまう声も、どこかのんびりとした色を含んでいる。

「ところで、一つ聞いても良いか」

「んん？ なんじゃ？」

グレースは、ここしばらくの疑問であつたことをいい機会とばかりに聞いてみることにした。

「P K Kギルドの連中にあんなに親切にするのは何でだ？ 鉱石を安く売るくらいは別に良いとして……相談を受けたりしてたのを見たぞ」

「はっは、見られとつたか。ま、あれじゃ……例のツルハシを作ってくれた知人が、あのギルドの創設者でな。リアルの都合で仕方なしにやめるとは言え、メンバーがちと心配だったもんじゃから、ワシがたまに様子を見ると約束したんじゃよ」

だから相談にもものっているし、時には人生相談まで受けるんじやとコルドはグレースに穏やかな顔で伝えた。

きっと今は居ない知人と遊んでいたときのことを思い出しているのだろうとグレースは思いながら、ふと一つひっかかった。

「じ、人生相談って、普通ゲームの知り合いにするものなのか？」

「いや、普通はせんじやろ」

グレースに問いに、コルンドは軽く笑いながら答えた。

「じゃがな。悩みも同じことではあるが、ゲーム内でそこそこの仲が良く、なおかつギルド員ではないワシだからこそ言えることもあるものでな。それに、相談とはいっても大概自分の仲で結論が出ているような物も多いしの」

「そのアバターで言われると、なんだか本当に中身までじいさん何じゃないかと思えてくるな」

「はっは、案外中身は美少女かもしれんぞ？」

「それはない」

「即答しおった……」

久しぶりののんびりとした時間に、グレースは自然と頬が緩んでいることに気がついた。

戦うだけばかりがゲームじゃないんだな。そう思いながら、彼はコルンドと他愛も無い会話を続けていく。

「平和じゃなー」

「ああ、平和だ」

プレイヤーキルから始まった白ネームの男と、いまだ赤ネームな男の友人関係は、まだ始まったばかり。

このしばらく後、とある採掘士の掘った洞窟が謎の黒い部屋につながったことによりダンジョン化するのだが、それがコルンドの掘った物かどうかは定かでは無い。

02・穴倉の主・下（後書き）

というわけで、02・穴倉の主でした。

今回は採掘＋畏なコルンドと刀剣と格闘という人気な組み合わせを使うグラスという男二人の組み合わせでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3660y/>

Technical Arts

2011年11月16日08時26分発行